

鈴木有郷牧師説教

10/24/10「枝が実を結ぶためには」ヨハネ15:1-11

生きる意味を考えることのできるのは人間だけです。何のために生きるのか。生き甲斐とは何か。充実した人生とはどのようなものか。生きていてよかったと本当に思えるのはどういう時か。これらの問いは、私たちが人間である限り、ある年齢に達すれば誰もが自問自答するものです。

現代人の最大の問題の一つは、これらの問いに背を向けて生きようとすることにあります。

それが証拠に、私たち現代人は、死を考えまいとします。現代社会を覆う若さの魅力の過剰評価はその現れの一つだと、ある社会学者は言っています。

私たち現代人が死を考えるのを避けて通ろうとするのは何故でしょうか。それは、死が、私たちをして、自分は‘真に生き甲斐のある人生を生きてきたか’という問いに否応なく向き合わせるからではないでしょうか。

現代人のもう一つの問題、それは生き甲斐に関して間違った答え、まやかしの答えを考え出し、それに満足しているということにあります。

現代人の最大関心事がともすれば、どれだけ財産を残したか、仲間に比べてどれだけ出世したか、どれだけの社会的地位を築いたかということに偏りがちなのは、その不幸な努力の現れだと言えます。

このように現代人は、生き甲斐を考えまいとするか、それとも間違った答えを出してそれに満足するかどちらかになりがちです。

以上のコンテキストにおいて、主イエスの次の言葉を考えてみましょう。「わたしは葡萄の木、あなたがたは枝である。枝が葡萄の木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしに繋がっていなければ、実を結ぶことはできない。」

確かに、枝は木にしっかりつながっていればこそ、実を結ぶことができるのです。枝がいくら頑張ってみても、木から切り離されては、枯れ行くばかりで、実を結ぶことはできません。

主イエスが言わんとする点は明白です。葡萄の木とは主イエスご自身です。枝は私たちです。葡萄の実は、生きる喜びであり、隣人に対する優しさであり、慈しみです。

ここで私たち現代人は主イエスに問いかけるかもしれません。

主イエスよ、確かに私たち人間は愛という幹につながってこそ愛することができます。しかし、幹は、何故あなたでなければならないのでしょうか。私達は両親から、兄弟から、親戚から、友人から愛されることによって愛することを学んできました。何故人間の愛を幹にしてはいけないのですか。

この問いに対して主イエスはどのように答えられるのでしょうか。主イエスの答えは次のような言葉で始まると私には思われます。

愛の中でも最も純粹で絶対的と言われる親の愛を考えてごらん。愛情豊かな親は子供のために命を捨てる。確かにそうだ。しかし、その絶対的な愛も、自分の子供だという条件が付いていないだろうか。赤の他人の子供のためにいかなる犠牲も惜しまないと自信を持って言える親がいるだろうか。

確かに人間の愛の中で最も絶対的と思われる親の愛も、ある状況の下では、憎悪という最も醜いものに姿を変えてしまいます。

最近のテレビニュースの映像に次のようなシーンがありました。アフリカの難民キャンプで食料の分配がありました。最後のパンを一人の母親が幼児に渡しました。それをもう一人の母親がもぎとり、自分の子供の口に入れました。突然二人の母親の間で凄まじいつかみ合いが始まったのです。

人間の愛は、すべて一つ間違えば憎悪と化す可能性を潜めています。親の愛も、友情も、愛国心もすべて条件付きという決定的な欠陥を持っています。

無条件で絶対的な愛、それは主イエスの愛です。自分を十字架につけ、唾する人々のために神に執り成しの祈りを捧げる絶対的な愛です。この世の力がよってもたかっても押さえ込むことのできない、真実で力強い愛です。

永遠なる同伴者イエスこそ、私達がつながるべき葡萄の木です。イエスにつながってこそ、隔ての中垣を切り崩して他者と連帯することができるのです。そのような生き方こそ人間らしく、生き生きと生きるということであるに違いありません。イエスにつながって生きることこそ、真に生き甲斐のある人生であるに違いありません。